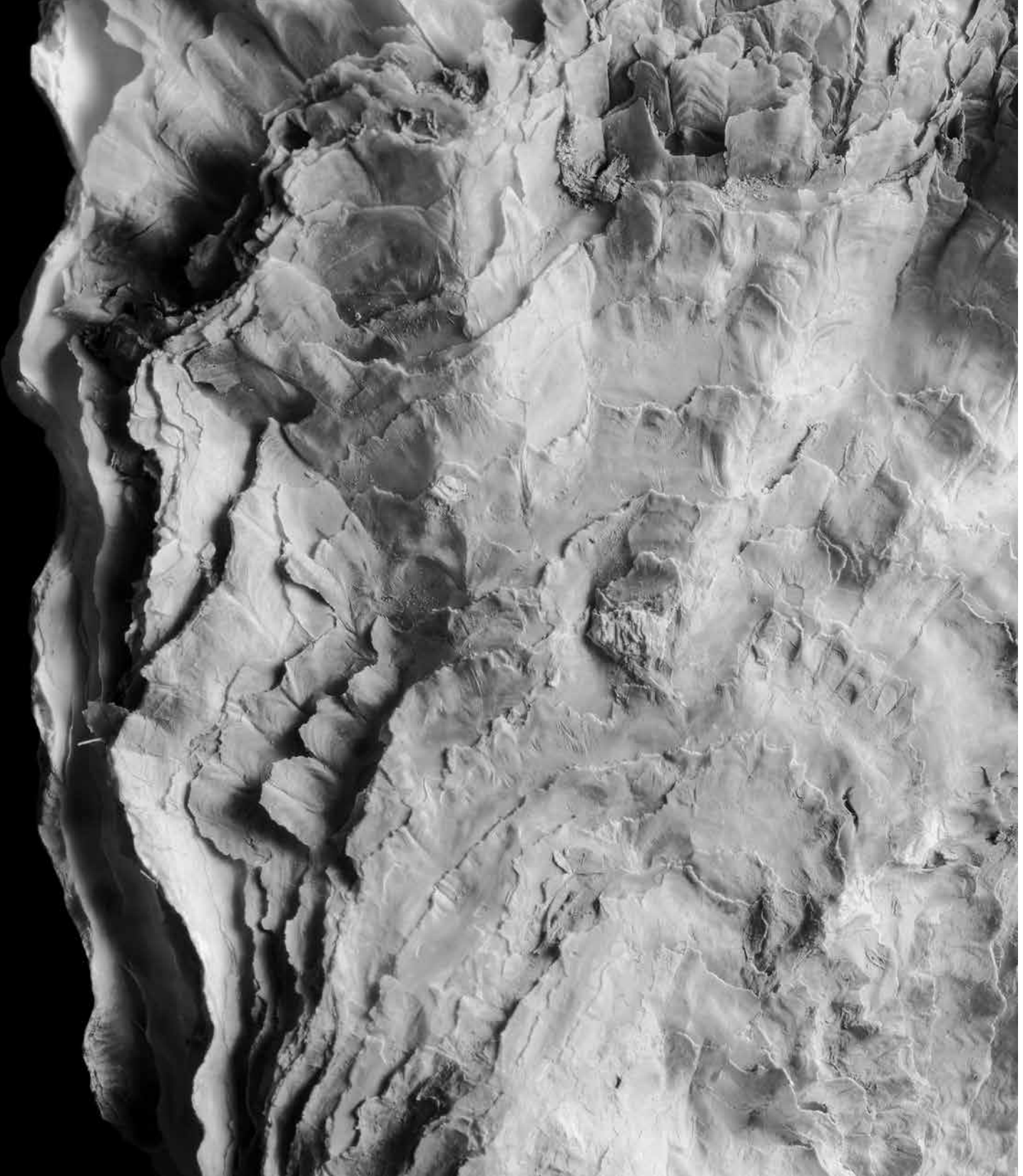


SCARTS×CoSTEP

ART&SCIENCE PROJECT BOOK

2024—2025



はじめに

CONTENTS

はじめに	p.3
アート&サイエンスプロジェクトについて	p.4
ワークフロー	p.5
テーマ「プレコンセプションケア」	p.6

EVENT REPORT

時間展望—もっと先の自分へ	p.7
---------------	-----

RESEARCH REPORT

荒木悠の探究	p.17
双殻網について	p.26
演出ノート 荒木悠	p.28

本冊子は、『荒木悠 双殻網:幕間 BIVALVIA: INTERMISSION』の開催にあたり、基盤となるプロジェクトの概要と、招聘アーティストである荒木悠の制作プロセスを詳細に紹介するものです。

札幌文化芸術交流センター SCARTSでは、次代を担う世代が文化芸術に触れる機会を創出し、異分野との交流による文化芸術や表現活動の新たな可能性を追求しています。「SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクト」は、北海道大学 大学院教育推進機構 オープンエデュケーションセンター 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP)と共に取り組む、アート・サイエンス・教育の分野を横断したプロジェクトです。

プロジェクトでは、招聘アーティストの制作プロセスに沿って、研究者との交流の機会を計画するほか、高校・大学生へのアプローチについても模索しています。高校教育における探究学習は、「自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する」という過程を経験するもので、それは、複雑化する社会と向き合う現代のアーティストの創作過程と通じるものがあると考えています。このことは、作品という成果物だけを発表するのではなく、アートとサイエンスという異なる領域にまたがって「問いを立てる力、柔軟な思考、表現する力」を試されるアーティストの制作プロセスも発信することでプロジェクトを特徴づけます。自身の興味に引きつけて、異なる領域を軽やかに行き来する荒木悠の制作プロセスは、知の探究が人間の自由な活動であるということに気付かせてくれます。教育機関でも研究機関でもなく、文化施設で生まれる様々な気づきが、さらなる新たな探究の一助となっていくことを願っています。

最後に、本プロジェクトの進行にあたり多大なご協力とご支援をいただいた関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクト
荒木悠 双殻網:幕間 BIVALVIA: INTERMISSION

会期:2025年2月15日(土)~3月2日(日)
会場:札幌文化芸術交流センター SCARTS
主催:札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)、
北海道大学 CoSTEP、札幌市
協力:無人島プロダクション
広報協力:札幌国際芸術祭(SIAF)
後援:札幌市教育委員会
助成:令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

アート&サイエンスプロジェクトについて

札幌文化芸術交流センター SCARTSと北海道大学 CoSTEPが共同し、若い世代のアートとサイエンスに対する探究心や感性を育むことを目的としたプロジェクトです。アートの創造性と科学的な探究との相互交流により、世界をひろげる学びの場をつくることを目指しています。

社会的に関心の高い科学的トピックからテーマを設定し、アーティストはそのテーマを出発点として自身の関心領域に引き付けリサーチを重ね、表現に結びつけます。その新たな視点や価値を見出す過程を一緒に体験するトークイベントやワークショップ、成果発表会を実施しています。



札幌文化芸術交流センター
SCARTS
SAPPORO CULTURAL ARTS COMMUNITY CENTER

札幌文化芸術交流センター SCARTSは、2018年にオープンした札幌市中心部にあるアートセンターです。札幌文化芸術劇場 hitaru、札幌市図書・情報館と共に札幌市民交流プラザを構成し、札幌における文化芸術の拠点です。市民の創造性ある活動をサポートし、札幌の文化芸術を支え、育てていくために、「あたらしい表現の可能性をひらく」「すべての人に開かれたアートとの出会いをつくる」「一人ひとりの創造性をささえる」という3つのミッションを定め、活動をしています。

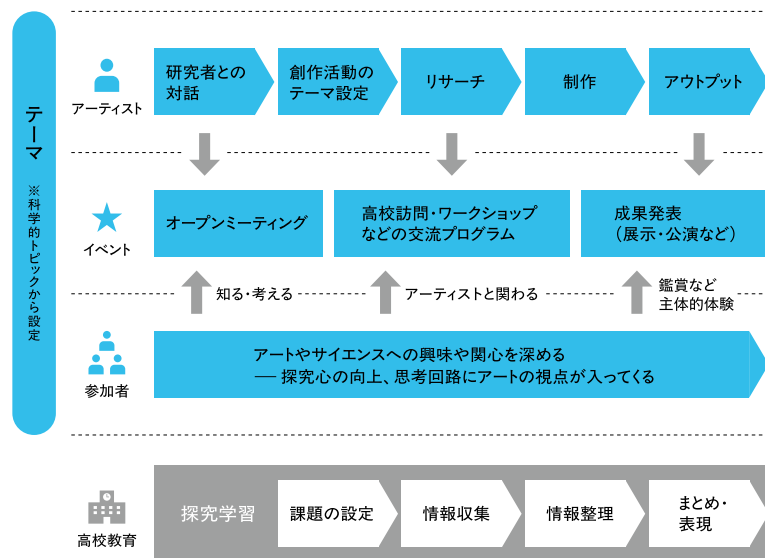


Communication In
Science & Technology
Education & Research Program

北海道大学 大学院教育推進機構 オープンエデュケーションセンターに設置されている、科学技術コミュニケーション教育研究部門 CoSTEP (Communication in Science & Technology Education & Research Program; コーステップ)は、科学技術コミュニケーションに取り組む、北海道大学の教育・実践・研究組織です。科学技術コミュニケーションの教育・研究・実践を、互いに有機的に関連づけつつ、学内外の機関と積極的に連携を進め、科学技術コミュニケーション活動を担う人材養成を行なっています。

ワークフロー

本プロジェクトでは、招聘するアーティストの一連の創作過程をプロジェクト全体の基軸として、ワークフローを設計します。アーティストの創作過程を、研究者との対話・テーマ設定・リサーチ・制作・アウトプットの5つに分け、各過程で生まれるさまざまな事柄をイベント化し、参加者とアーティスト、研究者との交流の場を作り出します。また、この一連の過程は、学校教育で取り組む「探究学習」の流れと緩やかに同期しており、各過程でアーティストがどのように考え、決定し、行動に移すかを知ることが、参加者自身の探究活動のヒントになると考えます。



テーマ「プレコンセプションケア」

公衆衛生学で研究されている「プレコンセプションケア」は、男女問わず、将来の妊娠・出産を見据え、現在の健康状態を確認したり、生活習慣の見直しを行ったりすることを指します。この考え方は、ライフステージやライフプランに応じた健康づくりを目指すものです。国際的には、WHO（世界保健機関）が「妊娠前の女性、カップルに対し、医学的・行動学的・社会的な保健介入を行うこと」と定義し、積極的に取り組むことが推奨されるなど、近年ますます注目されています。

2024年に札幌で開催された第83回日本公衆衛生学会総会においても「プレコンセプションケア」は話題であり、その重要性が再認識されました。さらに、令和6年度の札幌市学校教育の重点に含まれるキーワード「ウェルビーイング」の実現に向けた課題として、性教育のみならず、ライフプランを意識するための学習にも関連があると考え、このテーマを選定しました。

「プレコンセプションケア」を「アートとサイエンス」の視点で考えると、西洋医学に基づく栄養や身体のケアは、データや理論に裏打ちされた「サイエンス」であり、健康を維持し、妊娠に備えるための実践的なアプローチと考えられます。一方でライフステージやライフプランといった将来を見据えた考え方は、個人の価値観や主観的な判断に基づくもので明確な答えがなく、これは、自分がどう考えるかといった「アート・創作活動における視点」と重なります。

このことから、「プレコンセプションケア」をテーマに本プロジェクトのキックオフとして、「アーティストと研究者と考えるオープンミーティング『時間展望—もっと先の自分へ』」と題し、イベントを実施しました。



EVENT REPORT

SCARTS×CoSTEP
アート&サイエンスプロジェクト

時間展望—もっと先の自分へ

アーティストと
研究者と考える
オープンミーティング

—
2024年8月1日(木)
14:00～17:00

会場：SCARTSモールC
主催：札幌文化芸術交流センター SCARTS
(札幌市芸術文化財団)、北海道大学 CoSTEP、札幌市
後援：札幌市教育委員会
助成：令和6年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

Photo: Yusuke Momma

「時間」を意識するとき、それは「時刻」であり「期日」であり、「記録」や「歴史」「過去」「未来」で、いずれにしても、時の流れのなかの「瞬間」あるいは「瞬間から瞬間までの長さ」を思い描くのではないのでしょうか。ところが、人生には「時間」を区切らずに展望するべきときがあります。SCARTS×CoSTEPアート&サイエンスプロジェクトのテーマに掲げられた「プレコンセプションケア」にも時間展望が欠かせません。

文：一條亜紀枝

もっと先の私のために、 いまの私はなにをする？

真夏の昼下がり、眼下に創成川を望む開放的な会場には、「時間展望」や「もっと先の自分へ」という言葉、現代アート、科学技術コミュニケーションに関心をもった高校生や大学生、教育関係者から一般の方々までたくさんの方が集まってきました。これから3時間かけて、2名のアーティストと2名の研究者とともに、自分の「性」と「生」から「人生」を考えていきます。

イベントタイトルの「時間展望」とは、「未来における可能性を予測して見通しを立てること」。モデレーターを務めた北海道大学CoSTEP特任講師の朴炫貞さんによると、「個人を軸にして、過去・現在・未来という時間の流れを意識しながら、より良い未来をつくれるように人生設計を考えていくこと」であり、参加者それぞれには「一人ひとりの物語」を見つけてほしいといいます。未来の自分のために、過去からつながる現在の自分はなにをするべきなのか——。さて、探究のはじまりです。

PROFILE

朴炫貞（ぱく・ひょんじょん）| 北海道大学CoSTEP特任講師、博士（造形）（武蔵野美術大学）、アーティスト。韓国芸術総合大学と武蔵野美術大学大学院で芸術を学び、作品づくりとアートを通した科学技術コミュニケーションの実践研究を行っている。



TOPIC 1

性と人生を考える「プレコンセプションケア」

前田 恵理

北海道大学 大学院医学研究院 准教授

私の専門である「公衆衛生」は、市民や国民など集団のみんなが健康であるためには何をしたらいいのかを研究します。

今日お話ししたいのが「プレコンセプションケア」。あまり聞きなれないかもしれませんが、プレ(pre-)は「～の前」、コンセプション(conception)は「受胎・妊娠」を意味する英語で、つまり、妊娠前から健康づくりをしていこうという取り組みです。昔は、妊娠してから健康に気をつけて元気な赤ちゃんを産みましょう、という考え方が主流でした。一方、今は、妊娠とはほど遠いうちから健康になっておけば、健やかな妊娠と出産を迎えられるという考え方になっています。ではなにをするかという、「バランスの良い食事をとる」「太りすぎや痩せすぎに気をつける」「お酒は飲みすぎない」「タバコは吸わない」など、保健体育の授業で習う健康づくりです。

プレコンセプションケアは、「ライフコースアプローチ」に基づいています。これは、胎児期から老年期に至るまでの人生を通して健康のための対策を講じ、病気のリスクを下げ続けること。人間は受精から胎児期、小児期など成長段階にあ

る時期に、いちばん周囲の環境の影響を受けやすく、健康な親の子どもは、生まれたときから病気にかかりにくいといわれています。また、幼いころからの積み重ねで健康的な生活習慣を身につけることができれば、生涯にわたって病気にかかるリスクの低い人生を送れると考えられるのです。

一例をあげると——。DOHaD(ドーハッド)仮説と呼ばれる学説があり、小さく生まれた赤ちゃんは、将来生活習慣病になりやすいと、世界中の研究からわかっています。それを踏まえると、気がかりなのは若い女性たちのエネルギー摂取量がどんどん減っていること。過度なダイエットは次世代の健康を損ねてしまうかもしれません。だからこそ、ライフプランを考えてほしいのです。いつかは子どもがほしいのかどうか、ほしいのであれば、「いつ」「何人」産みたいのか、そのときがくるまではきちんと避妊する、そのためにも早め早めの健康づくりを心がける……と、ちょっと将来に考えをめぐらせてみてください。「性と生殖の健康と権利」は一人ひとりにあり、それらを決めるのは自分なのです。

PROFILE

まえだ・えり | 博士（医学）（東京大学）。専門は公衆衛生学。不妊症に悩む人を減らし、患者に対するより良い支援のあり方を提案するため、プレコンセプションケアを中心としたさまざまな社会医学的研究を行っている。



自分と人類の過去から未来を見つめる作品づくり

荒木悠

アーティスト・映画監督

過去・現在・未来を展望してみると、私は、文化の伝播や異文化同士の出会い、またその過程で生じる誤訳や誤読の持つ可能性に強い関心を寄せていると気づかされます。その原点は学生時代の自分探し。個性がなくて空っぽだとわかってから、作品をつくるときは、自分の内面にテーマを求めるのではなく、人生のなかでの発見や出会い、歴史上の出来事をもとに未来を見つめ直すという方法をとるようになりました。

これまでの私の仕事は、自分の意思ではない出来事によって導かれてきました。ひとつは、幼児期と思春期をアメリカで暮らした「越境の経験」、もうひとつは「衝撃的な出会い」。ワシントン大学2年生の時に、黒船を率いたあのペリー提督の子孫だという新生と出会い、びっくりして思わず彼と握手しちゃいました。そのとき、個人と歴史と時空がぐにゃ〜と大きく歪んだような感覚にとらわれたんです。その体験は、自分が日本人としてアメリカにいるという社会的文脈や歴史を意識させるきっかけとなりました。

今日は2つの作品を紹介します。まず、十和田市現代美術館の個展で発表した《NEW HORIZON》です。そう、英語の教科書のタイトルと同じですね。テーマ探しに苦労しましたが、とっかかりとなったのが、夜の街に煌々と輝く某ハンバーガーチェーン店のロゴマーク「M」。それが気になりつつ、私と同じく「よそ者」とし

て青森県に滞在中のALT(外国語指導助手)6名にインタビューします。彼らの異文化体験を取材しているなかで、ふと「日本初の英語教師は誰?」と思って調べると、江戸末期に日本に密入国し、のちにオランダ通詞に英語を教えた「ラナルド・マクドナルド」という人物でした。M社のピエロととても名前が似ていたことから、私のなかで回路がつながり、ALTの一人にピエロ姿になってもらい、日米の時空間をたゆたう映像作品が完成したのです。

次の作品は、恵比寿映像祭2023に出展した《仮面の正体(海賊盤)》。これはアメリカのロックバンドKISSのコピーバンドWISSを追った映像インスタレーションです。表の巨大LEDスクリーンにライブ風景を、裏に素顔の記録映像を流し、その奥には本家KISSのLP「仮面の正体」を飾り、まさに仮面の表と裏のようにつくりにしました。WISSを知れば知るほど、コピーなのに独自性が立ち上がってくるのですが、それをとらえた人間讃歌のドキュメンタリーに仕上げています。

残念ながら、時間を展望してプランを考えたところで実現しないこともあります。人生には台本がないのと同じですね。でも自分の経験や気づき、興味を突き詰めていくと、自ずと楽しい方向に道筋は開かれるはず。なので好奇心を大切にしてください。



上. 荒木悠《NEW HORIZON》2023年
十和田市現代美術館での展示風景 Photo: Kuniya Oyamada

下. 荒木悠《仮面の正体(海賊盤)》2023年
恵比寿映像祭2023「テクノロジー?」での展示風景 Photo: Yu Araki

PROFILE

あらか・ゆう | ワシントン大学(アメリカ)で彫刻、東京藝術大学で映像を学ぶ。日英通訳業の経験を活かし、誤訳に着目した制作を始める。近年の主な展覧会は東京都写真美術館(2024年)、十和田市現代美術館(2023年)、ポーラ美術館(2020年)など。



女性の生涯を支える産婦人科

佐野友宇子

北海道石狩振興局 保健環境部保健行政室
(北海道江別保健所) 主任技師

産婦人科とは、ゆりかごから墓場まで総合的に女性を診るところです。問診をしてから内診(触診)やエコー、クスコ(腔鏡)などで女性生殖器官を診察します。ちょっと怖いと感じるかもしれませんが、かかりつけの産婦人科医をもつことは、プレコンセプションケアでも大事です。

産婦人科には4本柱があって、1本目が「女性生殖器の病気の診断・治療」。生理の異常や性感染症、腫瘍などを見つけて治していきます。2本目は「周産期管理」。妊娠中の母親と胎児、出産直後の母親と新生児を総合的に診て、異常があれば医療的な手立てを講じて、安全な出産をサポートします。3本目は「不妊治療」。世界ではカップル5~6組に1組が不妊症ともいわれ、珍しくない症状です。産婦人科医は、原因を推定して、治療を提案します。覚えておいてほしいのは、男性側に起因する原因が半数近くを占めることです。4本目は「女性ヘルスケア」。思春期から性成熟期、更年期、老年期まで、それぞれの時期における女性の心身にまつわる悩みを解消するためのケアを行います。

次に症例を見てみましょう。症例1は妊

娠・出産の経験がない20代後半の女性。半年前から不正出血あり。診察の結果、ちょっと進んだ子宮頸がんが見つかり、同時化学放射線療法を行うことになりました。これは妊娠の可能性が閉ざされてしまう治療法です。予防と早期発見がなにより大事なので、HPVワクチン接種が可能な年代の方は接種を、そして定期的に頸がん検診を受けてください。

症例2は、妊娠・出産の経験がない50代前半の女性。2年前から不正出血あり。息が苦しいと救急車で運ばれてきました。悪性腫瘍が見つかり、化学療法が検討されたものの入院21日目に亡くなってしまいます。生理や不正出血は女性の健康のバロメーターになるもの。異常を感じたらすぐに産婦人科を受診してください。

症例3は、10代の女性。半年ほど生理がなく、妊娠を疑って産婦人科を受診したところ、妊娠24週と診断されました。予期せぬ妊娠はときに自分を幸福にしないこともあります。自分の身体の決定権をもつのは自分だと理解するためにも、早期の性教育が必要です。



PROFILE

さの・ゆうこ | 前職は産婦人科の臨床医。その経験から自分の心と身体に真摯に向き合う大切さを痛感し、現在は公衆衛生医師として、メタ的な視点からプレコンセプションケアや性教育に取り組んでいる。

負の感情とも向き合って生まれる物語

市原佐都子

劇作家、演出家、小説家、城崎国際アートセンター芸術監督

私は、人間の行動や身体にまつわる生理、それに対して女性として感じる違和感を、私の言語センスと身体感覚でとらえ直して作品にしてきました。今日は、2つの作品をご紹介します。

ひとつは、2017年に初演した《妖精の問題》。「妖精」とは「見えないもの」を表し、社会のなかで見えなくされているものへの問いかけとしてつくりました。創作のきっかけは、その前年に起きた相模原障害者施設殺傷事件です。当時すごくセンセーショナルに報道され、テレビではコメンテーターたちが口々に「許せない事件だ」と発言していました。犯人の行為は許されません。ただ、言葉にしづらいのですが、犯人の考え方はわかってしまう気がしたのです。当時、私は20代で社会通念やプレッシャーに息苦しさを感じていたからかもしれません。しかも、インターネットを見ると私と同じように感じた人が少なくないようでした。そんなふうに関心が出た社会も、私のなかの優生思想も恐ろしいと感じて、その感情にしっかりと向き合い、突き詰め、作品にしようと思ったのです。私は劇作家なので、ドキュメンタリーではなくフィクションという表現にこだわりました。

この作品は三部作で、一部「ブス」は落語、二部「ゴキブリ」は歌唱、三部「マ

ングルト」はセミナー形式として、性や生を否定する側も描きながら、全体を通して肯定しようと試んでいます。私が受けてきた「排除」や、私が他者に対してもっている「差別」を飛躍させて物語に落とし込みました。負の側面を直視しないのはすごく恐ろしいことだと思うのです。だから、フィクションを見ることで、現実の世界や自分の心を見つめるという、いわば「鏡」のような作品をつくりました。

もうひとつの作品が《バックスの信女ーホルスタインの雌》。古代ギリシアのエウリピデスが書いたギリシア悲劇を下敷きにして、現代における性と生の物語に書き換えた戯曲です。この作品は、かつて家畜人工授精師だった主婦が、人間本位に扱われ出産を強要される雌ウシにシンパシーを感じながら働いていたというモノログから始まり、ペットのイヌ、人工授精で生まれたヒトとウシのハーフである半神半獣、家畜のウシの魂からなる合唱団の歌と会話劇が続きます。

2つの作品を通して私が言いたかったのは、普段は抑え込んでいる感情や欲望を表に出してみると意外と恐怖を感じなくなったりするので、まずは自分の負の部分も含めた内面と向き合うことが大事なのではないかということです。



上. Q/市原佐都子《パッコスの信女—ホルスタインの雌》2020年 Photo: Shun Sato

下. Q/市原佐都子《妖精の問題》2018年
Photo: Kai Maetani, courtesy of Kyoto Experiment

PROFILE

いちら・さとこ | 桜美林大学で演劇を学び、2011年より劇団Qを主宰している。2019年、『パッコスの信女—ホルスタインの雌』にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2023年、世界演劇祭(ドイツ)にて『弱法師』を初演。



DISCUSSION
& INQUIRY

私たちの探究心を育てる

印象に残った登壇者の言葉があります。それは市原さんの感想で、「産婦人科の症例に共感してしまうのは物語の力だなと思いました。ただのデータではなく、その人の人物像が想像されて胸がぐっと苦しくなりました」。そう聞いた途端、事実を連ねた「情報」だった症例が、ある人の人生の「物語」として感じられました。それは《妖精の問題》のように「鏡」となって、自分の本音を映し出してくれそうです。

グループディスカッションの時間

講演と質疑応答のあとは意見交換。席の近い参加者が集まって5つのグループをつくり、事前に配布された「時間展望

カード^{*}」を使って、それぞれが展望する未来と、それを妨げかねない現在の気がかりを語り合いました。

展望した「未来」を共有する時間

最後に意見交換の内容を参加者みんなでも共有しました。高校生と大学生に多かった声は「10年後はなかなか想像できない」。とくに大学生は就職とキャリア形成を考える時期でもあり、「10年後は遠すぎて、人生設計に保険をかけすぎてしまう」と悩んでいるようです。社会人の話題の中心は「性教育」。自分の過去を振り返り、性にまつわる禁止事項ばかりを伝えるのではなく、自分の身体をもっと前向きにとらえて「可能性を広げるよ

^{*}時間展望カード=10年後の姿を考えるための「未来展望カード」と、それを達成するための懸念点を書き込む「現実カード」、話題提供での発見をメモする「なるほどカード」、質疑応答や意見交換に使用する「質問カード」のこと。

うな伝え方で性教育をやっていけたらいい」という結論になったといいます。健康に関心があるのは高校生も同じ。現在の夜ふかきを反省しつつ、10年後に思いをめぐらせたところ、全員の目標が「健康になりたい」になりました。

オープンミーティングを終えて思い出したのは、ミヒヤエル・エンデの児童文学作品『モモ』のなかのセリフです。「人間というものは、ひとりひとりがそれぞれのじぶんの時間を持っている。そしてこの時間は、ほんとうにじぶんのものであるあただけ、生きた時間でいられるのだよ」。時間展望により立ち現れてきた「一人

ひとりの物語」と、朴さんの締めくくりの言葉「明日、時間展望がわかるようになるのか、10年先なのか、焦らず向き合っていくという態度で、これからも考え続けたい」をかみしめ、私たちの探究は続きます。

オープンミーティングの翌日、荒木さんはCoSTEP部門長の奥本素子さんと朴さんの勧めにより、登壇者の市原さんとともに、産婦人科医であり、前田恵理さんの研究室で男性を対象にプレコンセプションケアの介入研究を行う工藤ありささんに会いに行きました。

INTERVIEW NOTE

男たちの「プレコンセプションケア」

工藤ありさ | 北海道大学 産婦人科医

不妊の原因の半分は男性にあるといわれています。1970年代からの50年間で精液の量や濃度、運動率が半減しているという研究結果も。ところが、日本では男性不妊の研究はほとんど手付かずで、前田恵理先生が2021年に秋田県で実施したコホート研究（疫学調査）が始まりです。その結果からは、不健康な生活習慣や栄養バランスの悪い食事のほか、睡眠不足が精子の質に悪影響を与えることがわかってきました。近年、精巣を温めるのも良くないという説もあるので、2024年11月から北海道大学で開始となった調査「男性へのプレコンセプション教育介入研究：札幌コホート」で明らかにしたいです。男性は、妊娠・出産による身体の変化がないため、当事者意識が低く、不妊につながる行動に無頓着ともいわれます。だからこそ、私たちは研究結果を正しく伝え、プレコンセプションケアを社会に定着させなければいけませんね。

(2024年8月2日 北海道大学にて)

RESEARCH REPORT

荒木悠 の 探究

Photo: Yu Araki, SCARTS (p.17, 23, 24, 25.上)



厚岸へ

荒木悠は気づいた。今回のテーマ「プレコンセプションケア」と、作品制作のモチーフとしてきた「牡蠣^{かき}」とが結びつくことに。

牡蠣は珍しい生態的特性があり、雌雄同体の種と雌雄異体の種がいる。乳白色の身は「海のミルク」とも呼ばれ、栄養価が高い。とくに葉酸や亜鉛、鉄分など、妊娠前に摂取したい栄養が多く含まれている。どう考えてもプレコンセプションケアとの親和性が高い。

荒木は探究を始めた。まず、牡蠣の振る舞いと養殖法の関係を研究する水産科学者の富安信氏、あらゆる生物の絡まり合いから生態系を考察するマルチスピーシーズ人類学者の近藤社秋氏にインタビューを行う。そして、牡蠣の名産地である厚岸^{あつけし}へと飛んだ――。



RESEARCH MAP

1. 厚岸町海事記念館
2. 厚岸町カキ種苗センター
3. 北海道厚岸翔洋高等学校
4. 厚岸湖
5. 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
厚岸臨海実験所
6. 愛冠岬
7. 厚岸漁業協同組合直売店
エーウロコ
8. 厚岸味覚ターミナル・
コンキリエ
(道の駅 厚岸グルメパーク)



INTERVIEW NOTE

美しく美味しい牡蠣をつくる

富安信 | 北海道大学 大学院水産科学研究院 助教

牡蠣は、昔から人間とのつながりが深く、その生態や生理は研究されてきました。ところが、養殖の牡蠣にはまだ謎も多いです。私たちは、牡蠣の振る舞いを調べて、より美しく、より美味しい牡蠣をつくるための研究をしています。その一つが厚岸町カキ種苗センターとの共同研究です。養殖カゴの中での行動を可視化するため、牡蠣に加速度計を装着して、殻の開閉運動を測定しました。その結果、呼吸や採餌、産卵・放精によって開閉のリズムは異なることが明らかに。また、条件が重なると、周りの牡蠣が一斉に産卵することもわかりました。さらに、海中で揺られながらイライラすることがあって、そのストレスが牡蠣を美しく美味しく成長させるのではないかと考えています。さらに実験を重ねて、牡蠣の価値を上げて水産業を支えたいですね。

(2024年9月13日 オンラインにて)

ONLINE INTERVIEW

オンラインで取材する

INTERVIEW NOTE

狩猟文化を守るために狩猟を学ぶ

近藤社秋 | 文化人類学者

私の専攻は文化人類学で、内陸アラスカ先住民（アサバスカン）の狩猟文化を研究しています。人間と多種多様な生物が一つの世界をつくっていると考える「マルチスピーシーズ人類学」の観点から、彼らとさまざまな動物との関わりに着目してきました。ヘラジカやビーバーなどの狩猟に同行して、観察記録を残すうちに、私自身が狩猟を実践しなければ、彼らの見ている風景や文化を本当には理解できないと感じたのです。

そこで現在は自分でも狩猟を始めました。ロシア人やアメリカ人と関わりを持つようになり、アサバスカンの人たちの生活や文化は大きく変わりました。それでも、時代に合わせてやり方を調整しながら、伝統的な生活圏と狩猟文化を守り続けている彼らに少しでも近づきたいと考えています。

(2024年9月13日 オンラインにて)

ONSITE RESEARCH

現地で取材する



DAY1 12月18日Ⓞ

☞ 移動日

厚岸は札幌から直線距離で280km。飛行機とレンタカーが便利で早い。新千歳空港から約45分、たんちょう釧路空港に降り立った。川が凍てつく寒さである。荒木悠のリサーチは、釧路市内にある炉端焼きの老舗「炉ばた」から始まった。ここは2019年に発表した映像作品《炉》の構想が生まれた場であり、撮影の舞台でもある。この作品制作のための取材旅行中、厚岸にも足を延ばしている。大好物の牡蠣を食べるためだった。今回はさまざまな角度から牡蠣を調査する。荒木は、「炉ばた」で懐かしい人たちの再会を果たし、偶然の出会いと光景がいくつも連なり、《炉》が完成したことを思い出しながら、厚岸を目指した。

DAY2 12月19日Ⓞ

☞ 調査・取材日

① 厚岸町海事記念館

まず向かったのは「海事記念館」。江戸時代から漁業で栄えた厚岸の、海と人々との密接な関わりを展示している。順路を進むと、歪んだ木材が並んでいた。それは、嘉永3(1850)年に厚岸沖で座礁した捕鯨船イーモント号の船底で、当時の状況を記した「日鑑記(複製)」も展示されている。この海難事故や後の調査が縁となり、1982年、厚岸町はオーストラリア連邦タスマニア州クラレンス市と姉妹都市提携を結ぶ。

荒木が熱心に見入っていたのが「牡蠣島」。正式には牡蠣礁かきしろうといい、浅瀬に身を寄せ合った牡蠣の塊である。学芸員の小田島賢氏によると、「厚岸湖にはかつて60を超える牡蠣島があったといわれています。古文書を見ると、牡蠣は1尺(約30cm)あるという記述も。明治初期に乾牡蠣が製造され、のちに小島利兵衛が牡蠣醤油や佃煮、酢漬、辛子漬、スープ、缶詰などの製造を始めます。ところが、明治15(1882)年ごろから乱獲でだんだんと数を減らし、昭和58(1983)年にカキが大量斃死したことから、いま、そこはアサリ島になっています」。

② 厚岸町カキ種苗センター

「カキ種苗センター」は、厚岸のブランド牡蠣の一つ「カキえもん」の種牡蠣(稚貝)を育てている。富安信先生に話を聞いたときから、荒木は見学を熱望していた。



厚岸町海事記念館の展示。
左上、捕鯨船イーモント号の模型。
右上、潜水漁という漁法で使用された潜水服。主にウニを採取する。
下、オーストラリアのカキ養殖についての展示ケース。標本のほか養殖法の説明も。



左上. 厚岸町カキ種苗センター。右上. 生物顕微鏡で見る牡蠣の幼生。日ごとに姿が変わり、殻ができると貝柱を使って開閉し、エラで餌や酸素を取りこむ。(画像提供:厚岸町カキ種苗センター) 左下. 中間飼育室で説明する武山所長。稚貝は海水温が上がってくる5~6月に生産者に渡す。右下. 餌料培養室。培養槽1基で500リットルの植物プランクトンが生産できる。

RESEARCH NOTE

厚岸生まれ厚岸育ちの牡蠣をつくりたい

武山 悟 | 厚岸町カキ種苗センター 所長

厚岸湖には数千年前から天然の牡蠣が生息していたといわれ、湖岸の遺跡からは牡蠣殻が出土しています。このまちと牡蠣の結びつきは長く、地元の人たちの思い入れも強い。昭和50(1975)年代、牡蠣が大量斃死したときも、宮城県から種牡蠣を仕入れて、牡蠣漁を続ける決断をしたのです。そのうちに「厚岸生まれの牡蠣を育てたい」という声が聞かれるようになり、1999年に開設されたのが、当センターです。毎年12月になると、厚岸湖で育成していた親牡蠣を施設内の水槽に収容します。約2か月かけて成熟させたら、卵と精子を採取して受精させます。孵化した幼生が0.35mmほどまで成長して目と足が現れたら、別の水槽に移します。敷き詰められた貝殻粉末からお気に入りを見つけると、幼生は浮遊生活を止めて固着生活に。貝殻粉末一つに稚貝一つが付着した状態を「シングルシード」といい、姉妹都市クラレンス市から学んだ種苗生産技術です。40日間ほどかけて4~5mmの稚貝になるまで育てます。私たちにできるのはここまで。この先は生産者のみなさんが工夫を凝らしながら、厚岸の海で稚貝を立派に育てあげるので。

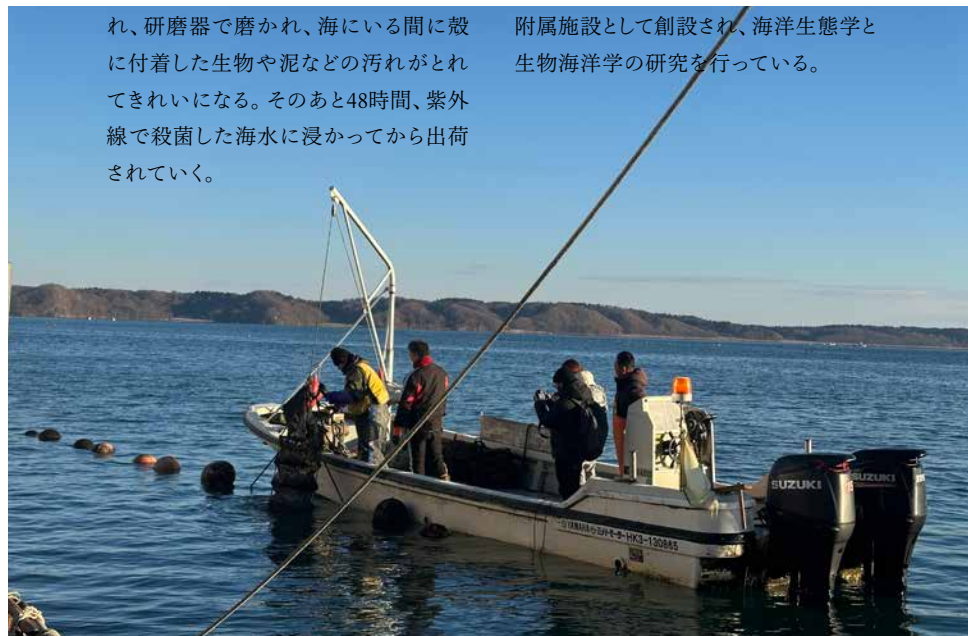
④ 厚岸湖

荒木が武山所長の案内で「厚岸湖」に着くと、鈴木賢二氏(漁師歴38年)は作業中だった。

厚岸湖での本養殖は、生産者たちが種牡蠣を養殖籠に入れて海中に吊り下げるところから始まる。牡蠣の成長に合わせて養殖籠を替え、海水温に合わせて厚岸湖と厚岸湾の二つの養殖場を使い分け、成長を待つ。この時期、出荷を控えた牡蠣は厚岸湖にいる。

荒木を乗せた作業船は、船着場から数メートルのポイントに止まった。丸籠が次々と引き上げられていく。1籠に牡蠣は約80個。1日の収穫量は800~1,000個になる。

陸にあげられると、牡蠣は海水で洗われ、研磨器で磨かれ、海にいる間に殻に付着した生物や泥などの汚れがとれてきれいになる。そのあと48時間、紫外線で殺菌した海水に浸かってから出荷されていく。



COLUMN

探究学習のヒント

北海道厚岸翔洋高等学校(MAP ③)は文部科学省の事業「マイスター・ハイスクール」の指定校。地元の水産業に貢献するべく、漁業者の話をよく聞き、課題を見出し、解決策をともに考えてきた。例えば、水中ドローンを使って漁場管理のスマート化を試み、海洋モニタリングシステムのデータを活用して牡蠣の産卵日を予測する。この取り組みはまさに探究学習だろう。(取材協力=教頭 長谷川智人氏、海洋資源科教諭 飯田直登氏)

⑤ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所

厚岸湾からの冷たい風に凍えながら歩くこと30分、切り立った崖の下に「北海道大学 厚岸臨海実験所」はあった。昭和6(1931)年に北海道帝国大学理学部附属施設として創設され、海洋生態学と生物海洋学の研究を行っている。

厚岸湖の生態系の変化を予測、解明する

仲間 雅裕 | 北海道大学 教授、北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所 所長

当実験所では、厚岸湖の生態系の変化が牡蠣やアサリに与える影響と、逆に牡蠣の存在が周辺の生物多様性に及ぼす変化について研究しています。牡蠣はもともと泥場に生息する生き物です。厚岸大橋のあたりから厚岸湖へと広がる干潟に棲みつき、牡蠣礁をつくっていましたが、いまは消滅してしまいました。その理由は、森の伐採によって土砂が流れ込んだからとも、冷たい水が流れ込んだからとも考えられますが、まだ解明されていません。ただ、気候変動によって厚岸湖の生物の構成が変わってきているのは確かです。実験所が昭和25(1950)年から観測してきたデータを見ると、海水温が1.5℃ほど上昇しています。最近では海面も海中も平年より5℃くらい高く、コンブやホッカイシマエビが打撃を受けました。近年の気かりは、集中豪雨。淡水がたくさん流れ込んで長く留まり続けると、牡蠣やアサリの生息適地が減るリスクもあるのです。これからも厚岸湾のモニタリングを続け、データを蓄積していけば、環境や生態系の変化を予測し、その要因を解明できると考えています。

インタビュー終了後、実験所内の「水族室」を見学させてもらう。水中生物のための部屋だから、人間には寒い。荒木はぐるりと室内をめぐるあと、しばし考え、三脚にカメラを固定する。撮影が始まった。室内には海を望む窓から明るい光が差し、蛇口から水槽へと滴り落ちる海水の音だけが響きわたっている。



⑥ 愛冠岬

仲間教授に勧められ、「愛冠岬」を目指す。ダケカンバやエゾマツの森を抜けると、鹿の群れが草を喰んでいる。さらに進むと、眼下に厚岸湾が広がる。正面には国の天然記念物に指定されている大黒島、左手に緩やかに弧を描く筑紫恋海岸、右手に夕焼け。この風景を、荒木はカメラに収めた。

⑦ 厚岸漁業協同組合直売店エーウロコ

荒木は形の良い牡蠣殻を探していた。ならば「エーウロコ」である。厚岸漁協の直営とあり、水槽にはたくさんの牡蠣がいる。「カキえもん」は丸籠で揺られて育つから形は良いが、理想の殻はあるのか？ 牡蠣生産者に間違われるほど真剣に水槽を見つめる荒木。最終的に5つを選び、店内の電子レンジでチンして身を味わい、殻を丁寧に持ち帰る。

☞ 撮影・移動日

⑧ 厚岸味覚ターミナル・コンキリエ

前日までと違って変わって雪が舞う。ホテルをチェックアウトして向かったのは「コンキリエ」。滞在中は情報収集と食事のために何度も訪れたが、いよいよ撮影だ。「炭焼 炙屋」で炭火を起してもらい、焼き網に牡蠣をのせると、荒木はカメラを回し始めた。静けさのなか、荒木は牡蠣を見つめる。牡蠣に変化はない。荒木は待つ、ひたすら待つ。牡蠣が口を開くまでカメラを回す。

COLUMN

リサーチめし

腹が減ってはリサーチができぬ。生牡蠣、焼き牡蠣、蒸し牡蠣、酢牡蠣、牡蠣フライ、牡蠣の Pasta……どの牡蠣もぶりぶりとして甘みが強く、濃厚な味わいだ。評判どおりの厚岸の牡蠣が、荒木悠の血となり肉となり、作品となっていく。



ABOUT BIVALVIA

双殻綱について

《双殻綱プロジェクト》は、人生の有限性と無限性に向き合うため、2017年からライフワークとして取り組んでいる全五幕のシリーズです（2025年現在、第二幕までを発表）。友人の死を前に襲われた圧倒的な虚無感。避けては通れない生から死への航路について、あの時の感情の正体を探り、カタチを与えることで私なりに考えたいと思いました。そうした個人的な感情や感傷から生まれた問いを、あえて客観的な視点で見つめるため、「BIVALVIA 双殻綱」と題しました。これは、分類学者カール・フォン・リンネが「二枚貝」として分類したラテン語の学名に由来します。貝殻は亡骸であると同時に、空っぽな私自身の表象でもあるのです。

スペイン・ガリシア地方滞在中、牡蠣を意味するスペイン語「ostra」の語源がギリシア語の「ostéon（骨）」と関連する説があることを知りました。また、現地のレストランで大量の生牡蠣が食され、皿の上に“骨”が次々と積み上げられていく光景を目の当たりにしたとき、西洋における「Vanitas（空虚）」と仏教思想の「刹那生滅」が結びつくような感覚を覚えました。さらに、貝殻の表面に刻まれる凹凸が「sculpture（彫刻）」と呼ばれること、英語の「oyster」には「寡黙な人」という意味があること、「口」と「貝」から成る「唄」という漢字が、梵語で法要の際に身心を静めるための曲に由来すること—本プロジェクトはこうした小さな気づきの積み重ねや出会いを栄養分として、「輪廻転生のオペラ」へと成長しました。

《双殻綱：幕間》と題された今回は、第二幕と第三幕の狭間にあたる、束の間の“休息”です。しかし、舞台裏では次の幕への準備が着々と進み、貝もまた呼吸を続けています。かつて古代中国では、蟹気楼は巨大な蛤によって生み出されると信じられていました。無口な貝がひとたび口を開くとき、どんな景色を映し出し、何を語るのか。海の深淵を覗くように、その静かな眠りを見守っていただければ幸いです。



荒木悠《双殻綱：第一幕》2017年／2019年 ピンチュク・アートセンターでの展示風景 Photo: Yu Araki



荒木悠《双殻綱：第二幕》2022年 無人島プロダクションでの展示風景 Photo: Yu Araki

演出ノート

荒木悠



Photo: Yu Araki

PROFILE

あらかき・ゆう | 1985年山形県生まれ。米国ワシントン大学で彫刻を、東京藝術大学大学院では映像を学ぶ。英語圏で「 casting」と呼ばれることに着想を得て、物事の両義性とその差異を再現・再演・再生といった手法で探究している。その関心は言葉遊びから食文化に至るまで多岐にわたる。近年の主な展覧会や上映に、バンコク実験映画祭(2025年)、グルベンキアン近現代美術館(2024年)、東京都写真美術館(2024年・2023年)、十和田市現代美術館(2023年)、マルセイユ国際映画祭(2021年)、資生堂ギャラリー(2019年)、ロッテルダム国際映画祭(2018年)など。2017-8年には光州のACCとアムステルダムのライクスアカデミーでゲスト・レジデントとして滞在。恵比寿映像祭2023「コミッション・プロジェクト」で特別賞を受賞。2024年度ポーラ美術振興財団在外研修員。

私の“貝殻旅行”

札幌出身の画家・三岸好太郎(1903年～1934年)は、貝殻をモチーフにした絵画作品《のんびり貝》が売れたそのお金で節子夫人と“貝殻旅行”へ出かけ、そのまま帰らぬ人となりました。私が《双殻綱》プロジェクトを進める中で三岸氏の作品に触れ、彼のアンリ・ルソーからの影響や道化への興味など、貝以外にも私自身の活動との共通項が多く、常に気になる存在でした。日本のシュルレアリスムの系譜で語られることが多い三岸氏ですが、貝と蝶のツガイとしての共通性や、殻と翅は開閉する点などにおいて、彼が選んだモチーフは実にロジカルな図像選択であるように思えるのです。

今回、SCARTSとCoSTEPの皆さんと訪れた厚岸での取材は盛りだくさんで、私にとって極めて重要な“貝殻旅行”となりました。海事記念館で歴史を学び、漁協組合エーウロコでは作品の被写体となる牡蠣を探し、厚岸町カキ種苗センターでは牡蠣養殖についての造詣を深め、牡蠣生産者さんのところで水揚げを見学し、北海道大学の臨海実験所で海を巡る環境問題の現状に触れ、最後に道の駅コンキリエ(イタリア語で貝殻の意)で焼き牡蠣を撮影しました。餌となる良質なプランクトンの管理から母貝の生育、卵と精子の受精と水温管理など、あらゆる面で徹底された牡蠣養殖の現場にて、私はプレコンセプションケアの縮図をみた気になり、牡蠣がますます人間のように思えたのでした。

新たな挑戦としての制作

制作で大切にしているのは、毎回新たな挑戦をすることです。今回、COSMIC

LABのご協力により、私にとって初のCGIアニメーション作品が実現しました。制作過程としては、まずフォトグラメトリという技術で牡蠣殻の表面を様々な角度から撮影し、取り込まれたデータを元に3DCGモデルが生成され、バーチャル空間内で再現されます。その結果、肉眼では捉えられない殻の表面や、現実世界のカメラでは得られない視点からの“映像彫刻”が立ち現れるのです。CGIを担当して下さったKEN IMAIさんは、もともと宇宙への関心が深く、加えて元プロスキーヤーで映像作家という異色の経歴の持ち主。牡蠣殻を小惑星のランドスケープのように表現していたく上で、この方以外に居ない!という確信がありました。一方、技術に疎く何も出来ない私に唯一残された仕事は、被写体となる牡蠣殻を探すことくらいでしたが、簡単に思えるこの作業が難航を極めました。なぜならこの「彫刻」も唯一無二で味わい深いからです。星の数ほどある牡蠣の中からたったひとつを選ぶには、何が決め手となりうるのか?

未知なる“彫刻”との遭遇

運命的な出会いは思いがけない航路から訪れるものです。厚岸滞在の終盤、先述のコンキリエ内のレストランで、CoSTEPの奥本素子さんがランチに選んだ「カキテキ御膳」に付いてきた蒸し牡蠣。その殻が、今回の主役に選ばれることになりました。よほどピンときたのか、他人の食事であるにもかかわらず、気付けばレンズを向けていました。

厚岸産牡蠣の特徴である殻の深さと身入りの良さは、シングルシード方式と呼ばれる育て方に由来します。シングルシ

ード方式とは、籠の中でそれぞれの牡蠣の個体を浮遊させながら育てる養殖方法です。この技術を国内で初めて導入したのは厚岸で、その起源は今から175年前の1850年に遡ります。オーストラリアはタスマニア州の捕鯨船イーモント号が末広沖で遭難し、当時の厚岸町民が乗組員を救助するという出来事がありました。この縁で、1982年には厚岸とタスマニア州クラレンス市が姉妹都市協定を結びます。その翌年の1983年、厚岸で牡蠣の大量斃死が発生。牡蠣漁復興を目指すなか、文化交流の一環としてクラレンス市を訪れていた厚岸の中学生たちがシングルシード養殖を見学。このときの知見が技術導入に繋がった、と言われています。

トレイに乗って我々一行のテーブルに流れついたひとつの蒸し牡蠣。もし私が奥本さんの隣に座っていなければ、この彫刻の存在に気づかなかったかもしれません。制作とは選択の積み重ねです。とはいえ、全てが思い描いたとおりになるわけではありません。偶然によって思いがけない方向へ導かれていく瞬間、またそのように造形判断がなされていく作品に、私は人生同様、豊かなドラマを感じます。

リメイク、リライト、リカバー

これといった強い個性や取り柄があるわけでもなく、ある意味空虚な「私」に作ることでできる物語は、一体どんなものがあり得るのか。放送作家で作詞家の永六輔は「人間は二度死ぬ、肉体が減びたとき、人々に忘れ去られたとき」という名言を残しました。私のようなちっ

ぽけな表現者にできることは、過去の人物やイメージ、既存の物語を語り直し、それこそカラオケのごとく過去を唄うことでその記憶を現在に蘇らせ、リヴァイヴさせることしか出来ないのではないか…いつしかそう思うようになりました。

《双殻綱》は2019年にウクライナのキーウで展示された経緯もあり、以降コロナ禍と戦争の時代を並走したまま2022年に《第二幕》を発表し、今回の《幕間》へと続いています。2021年3月31日付けで日本から姿を消した昭和シェル石油のロゴマーク(同年4月からギリシア神話の太陽神アポロへと変身!)や、日本の主要な牡蠣産地である広島や長崎との関連から、《第三幕》はいよいよ太平洋をテーマに展開される兆しが見えつつあります。《第一幕》にも登場する「私は牡蠣になりたい」という台詞は、『私は貝になりたい』の原作者・加藤哲太郎氏による獄中手記の初稿からの引用です。映画やドラマ化された同作を巡る脚本家・橋本忍氏に対する著作権侵害申立てで加藤氏が挙げた証拠のひとつでした(草稿から清書の段階でカキが貝へと変化したのは大変興味深いものがあります)。また期せずして、このテキストを執筆中にかつてリメイク版映画の主演を務めたタレントが芸能界引退を発表しました。そのタレントの会社名と三岸作品との奇妙な符合にも思わず目を引かれますが、真相は貝のみぞ知ると言えるでしょう。この件に限らず、広義の意味での「プレコンセプションケア」として、自分自身と他者の「生の権利」と「性の権利」を当たり前主張できる社会へと変わることを強く願います。



Photo: Yu Araki

2025年2月発行 企画製作:札幌文化芸術交流センター SCARTS、北海道大学 CoSTEP
執筆:一條亜紀枝(pp.8-25)、荒木悠(pp.27-30) 編集:札幌文化芸術交流センター SCARTS、中西要介(STUDIO PT.)
デザイン:中西要介(STUDIO PT.) 印刷:藤原印刷株式会社
発行:札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)
〒060-0001 札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ TEL: 011-271-1955

©SCARTS Printed in Japan